13　中川七曲り、六橋、七神社めぐり　（距離約 9.5km）

中川の青砥橋から下流左岸

【街歩きの概要】

中川は、埼玉県羽生市を源流として、大落古利根川、新方川、元荒川、大場川などの河川をあつめて南下し、東京都葛飾区高砂で二つに分かれる。一つは新中川となって東京湾へ、他方は「中川七曲り」と呼ばれる蛇行区間を経て綾瀬川と合流し、上平井で荒川と平行して流れて東京湾へと注ぐものだ。

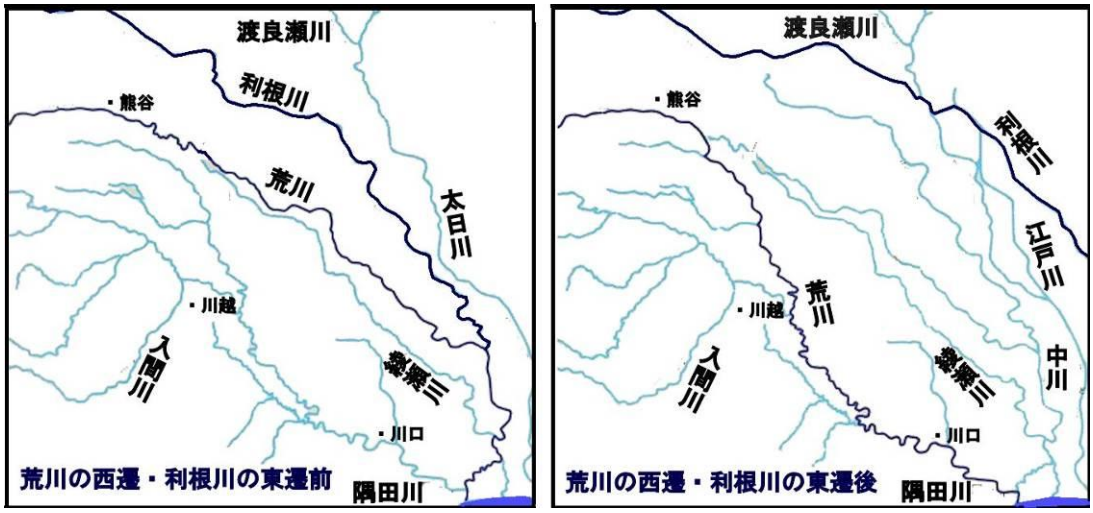
旧版地形図をたずさえて、「中川七曲り」と呼ばれる都会の中の特徴的な蛇行区間を訪ねて、そこに架かる六橋を渡り、辺りの七神社もめぐりながら、中川や荒川の歴史を知る街歩きをする。

地図豆知識　中川

中川は、大落古利根川、新方川、元荒川、大場川などの河川をあつめて南下し、葛飾区高砂で二つに分派する。一つは新中川となって東京湾へ、他方は「中川七曲り」と呼ばれる蛇行区間を経て綾瀬川と合流したのち、荒川と平行して流れて東京湾へと注ぐ（既述）。

一方江戸時代初期までの中川は（そのころは中川という名の川は無かったから、この辺りは）、利根川や荒川の本流で江戸（東京）湾に注いでいた。

その後、徳川家康の命を受けて、文禄 3 年（1594）から承応 3 年（1654）のころまでに行われた工事によって利根川東遷事業が始まる。その結果、利根川は現在のような流路になって現千葉県銚子市辺りで海へと注ぐ。さらに、寛永 6 年（1629）には、伊奈備前守忠治によって荒川の西遷が行われた。熊谷市久下で荒川を締め切り、堤防を築くとともに新川を開削し、荒川の本流を当時入間川の支川であった和田吉野川の流路と合わせ、隅田川を経て東京湾に注ぐ流路に変えたのである。以来、荒川の河道は現在のもの（隅田川と）とほぼ同様の形となった。

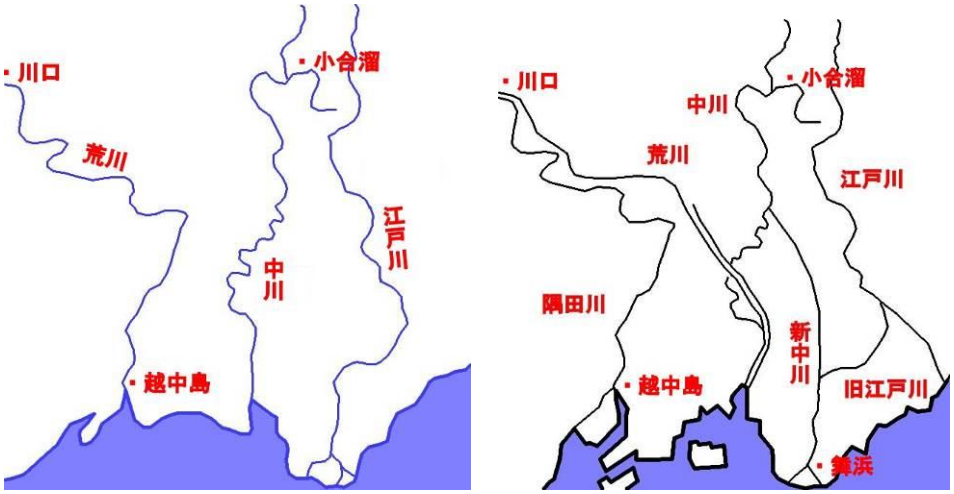


利根川の東遷・荒川の西遷前後の河川（河道）の変化

その後現中川周辺では、利根川が氾濫すると古利根川に洪水が流入して現在の三郷市付近で水害が起きることから、享保 14 年（1729）下流に中川筋を開削し、江戸川に注いでいた古川を閉じ、現水元公園に小合溜め（遊水池）をつくった。工事を担当したのは、日本最古の閘門式運河　見沼通船堀を完成させたことで知られる井澤弥惣兵衛である。

そのとき中川は、付近に散在していた池沼を連ねたので、小合溜め入り口から南下した流路は現在の「中川七曲り」、そして現江戸川区平井の先にある旧中川をつないだ、大きく蛇行した流れとなって江戸（東京）湾に注いでいた。

さらにその後、明治 43 年の大洪水を契機に、東京の下町を水害から守る抜本対策として着手されたのが、「荒川放水路」の開削である。この工事は、北区の岩淵に水門を造って本流を仕切り、岩淵の下流から中川の河口方面に向けて、延長 22km、幅 500m もの放水路を掘るという大規模なもの。洪水時には、岩淵水門を閉めて本流（隅田川）の増水を抑え、洪水の大部分を幅広い放水路でいっきに海に流下させるものである。全体の竣工には 20 年の歳月を要し、昭和 5 年に完成した。



東京湾に注ぐ主な河川（河道）の変化

利根川の東遷・荒川の西東遷後と、現在の河道

昭和 3 年（1928）には、荒川放水路の左岸に中川の放水路も完成し、これが中川の流路となった。その結果、江戸川区平井より下流は、上流部が失われて旧中川となった。さらに、中川放水路（新中川）は、昭和 24 年（1949）に開削が本格化、昭和 38 年（1963）にはこれも完成し、現在の姿になった。

地図豆知識　蛇行

蛇行とは、文字通り蛇が這う姿のように曲がりくねって流下する（川の）流れのこと。川の蛇行では、流れがカーブの内側となる場所では流れが遅くなり土砂が堆積される。一方の外側となる場所では流れが急となり、水深も深くなる。

蛇行には、自由蛇行(自然蛇行)と穿入蛇行（嵌入蛇行）があり、自由蛇行は平野部の河川で洪水のたびごとに流路の位置を変えるような状態にあり、周囲に侵食された谷を形成しないもの。

穿入蛇行は山地内などで蛇行した河川が深い河谷を作っているもの。これは、かつて平野上を自由蛇行していた河川が、地盤の隆起あるいは海面の後退などによる浸食基準面の低下によって下刻する（川底を低下させる）ようになったために生じる。四万十川や大井川の中流などのような山地や丘陵地などに発達していることが知られる。

【道順】

京成　高砂駅→1（高砂）天祖神社→大光明寺→1 高砂橋→2 中原八幡神社→2 青砥橋→旧河道（スポーツセンター）→3（奥戸北）水神社・（奥戸）水神社→3 奥戸橋→4 熊野神社→帝釈大王（道標）→4 本奥戸橋・子育観音→東立石緑地公園→5（東立石）水神社・眞禅寺→5 平和橋→6（東新小岩）天祖神社→6 上平井橋→7 浄光寺（木根川薬師）→旧河道（木根川）→京成　四ツ木駅

【街歩き解説】

①京成　高砂駅

高砂駅から、「中川七曲り、六橋、七神社めぐり」をスタートする。

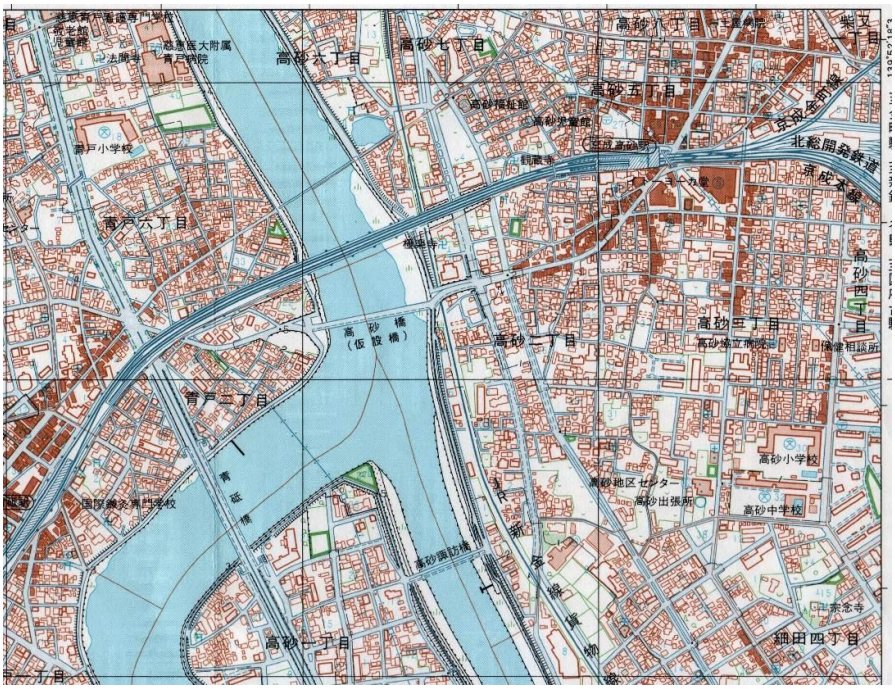
②（高砂）天祖神社

高砂駅から西に進むと住宅地の中に、りっぱな社殿の（高砂）天祖神社がある。旧曲金村の鎮守で、かつての別当（統括管理者）は京成線の北にある観蔵寺であった。

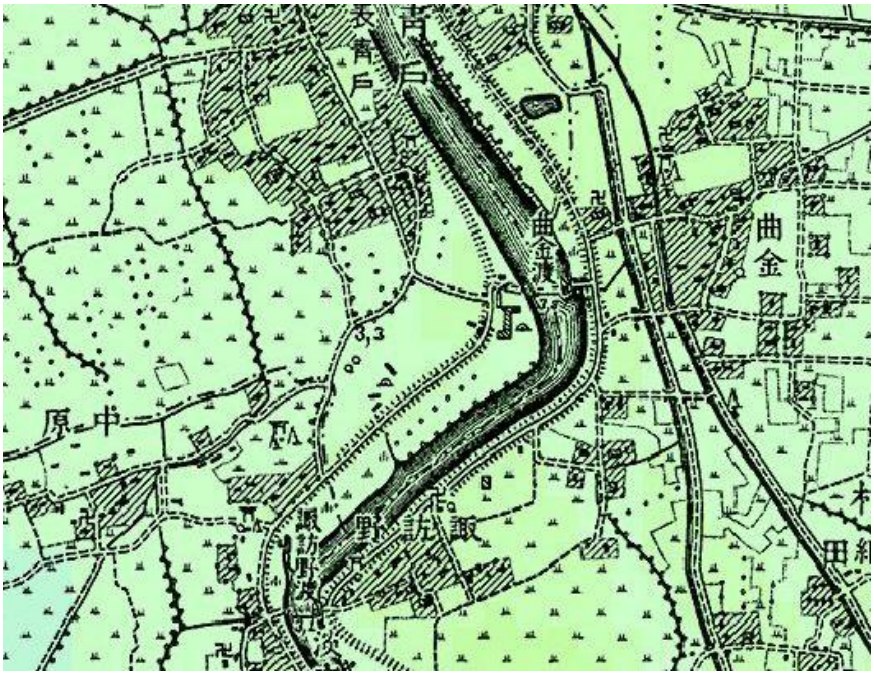
この辺りは、昭和 7 年の市郡併合までは「曲金（まがりかね）」と呼ばれた。昭和 5 年の地形図では、駅名は「たかさご」、集落名は「曲金」となっている。じっさい、京成駅も当初は「曲金（まがりかね）」であったが、開業翌年の大正 2 年（1913）6 月 26 日 の高砂駅に改称したという。その理由は、「曲金」ではいかにも縁起が悪いというもの。これにならって辺りの地名も解消されたという。

その「曲金」の「かね」は「湾曲した淵瀬」の意味だという説がある。淵瀬、すなわち川の深くよどんだ所と浅くて流れの速い所などのことであるから、本来「中川七曲り」にふさわしい地名であった。

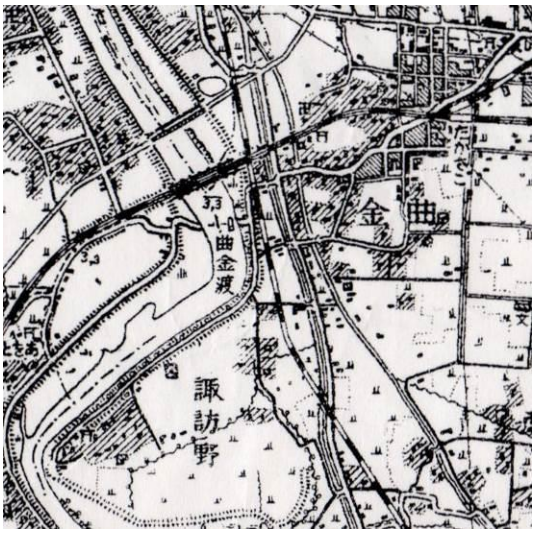
旧版地形図の、現高砂橋辺りには「曲金の渡し」が見える。これを渡って曲金の村を抜けて、柴又帝釈天へと通じていた。また、昭和5年地形図の「曲金（高砂）」集落の北側には、北東から南西に向けて一直線の道路が走っているのが読み取れる。これは、金町浄水場の水を通すために水道管が付設された水道道路（「江戸川水道路」）である。その水道道路の北側には、昔も今も寺院が並んでいるのは、関東大震災で罹災した都内の寺がその当時に移転してきて出来たのだという。昭和3年ころのことである。



地形図　1　(1/10,000 地形図「青砥」H10)

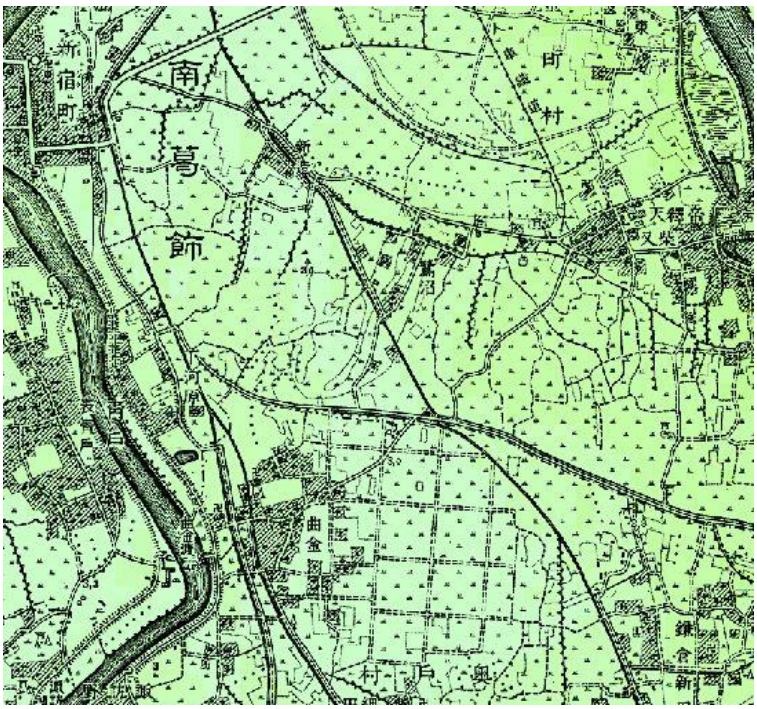


地形図　1　(1/20,000 地形図「東京東部」「千住」M42)



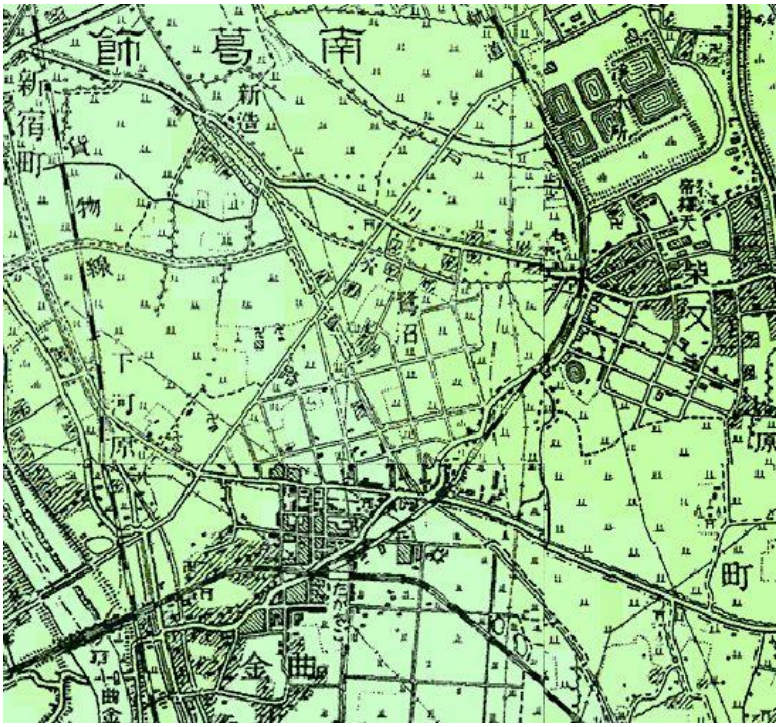
曲金（現高砂）辺り　（高砂）天祖神社

（1/25,000 地形図「東京首部」S5）



江戸川水道路の開通前

（1/20,000 地形図「草加」「千住」M42）



金町浄水場から直線的に延びる江戸川水道路の開通以後
その北側には寺の記号がいくつも見える
（1/25,000 地形図「東京首部」「松戸」S5）

③大光明寺

現在は新中川へりにある大光明寺は、鐘楼のある山門が特徴的で、明治 42 年地形図から、ずっとおなじ位置に記号の記載がある。かつてこの地にあった極楽寺の本堂・庫裡・芸能塚などをそのまま引き継いでいるという。そして、その極楽寺は青砥の地名の由来ともなった、青砥藤綱によって創建されたと伝わる。

④高砂橋

旧版地形図には、永く渡し船の記号があって（「曲金の渡」）、高砂橋が登場するのは昭和 22 年（1947）の地形図からで、その後、2003 年に建てかえられた。

総武線新小岩駅と常磐線金町駅を結ぶ新金貨物線が立体交差する。

⑤中原八幡神社

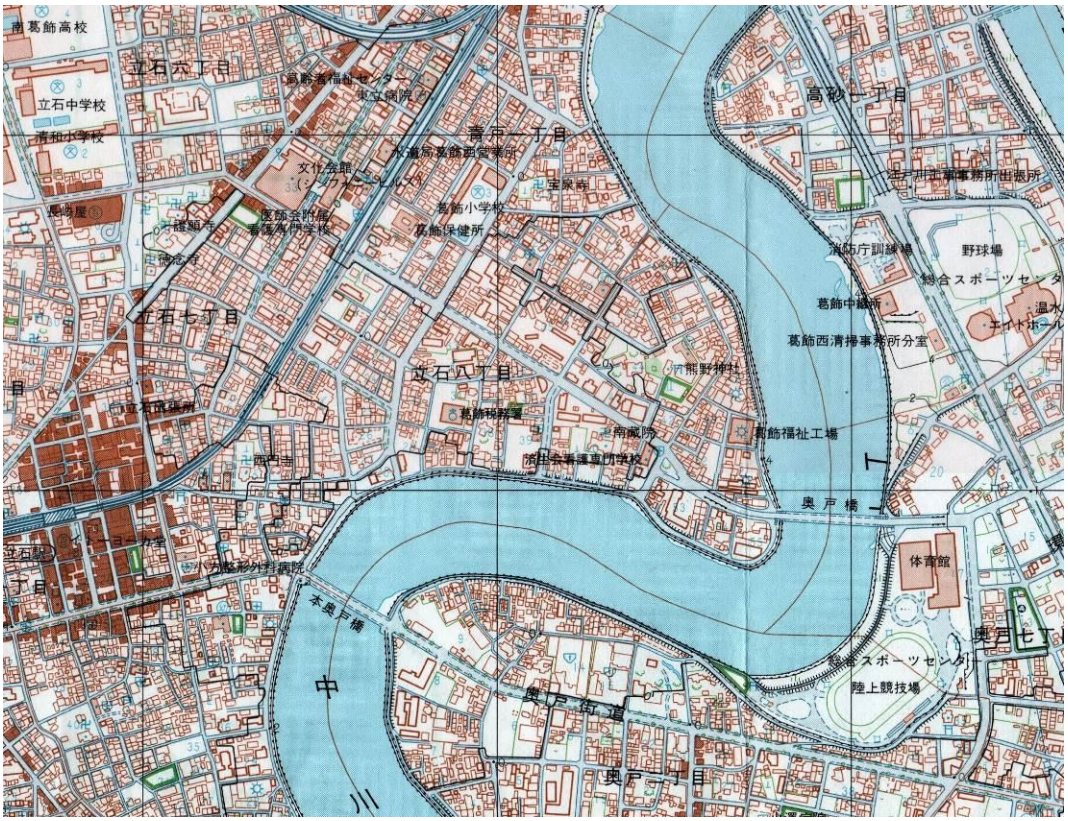
高砂橋を渡り、中川からは少し離れて、京成線青砥駅近くにある八幡神社を訪ねる。同社は、旧中原村の鎮守だという。

高砂橋

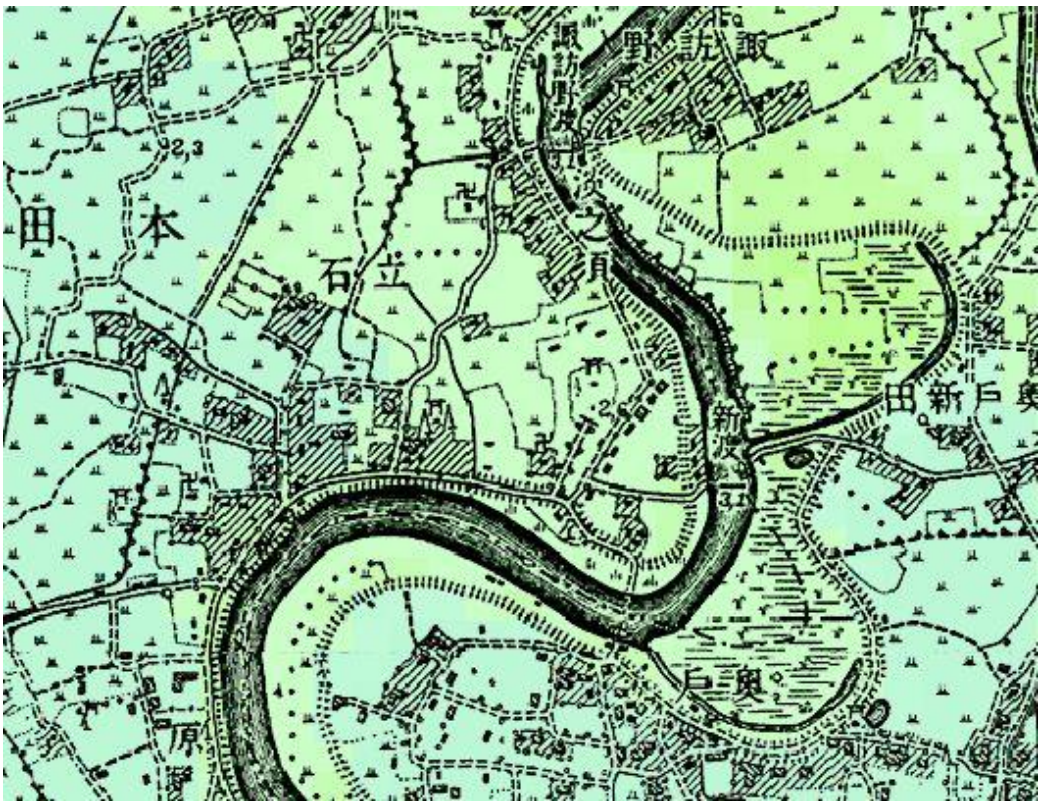
⑥青砥橋

再び中川にもどって青砥橋を渡る。同橋は 1985 年に竣工した初建設された比較的新しい橋である。橋上からは、中川放水路と中川にかかる多くの橋が見え、みごとな蛇行の風景が広がる。青砥橋南詰からは、下流に向けて曲線を描く遊歩道が延びる。橋を渡ってまもなく、蛇行の風景の中に、まっ赤な鳥居の諏訪野八幡神社が見えるはずだ。

ここは、かつて「諏訪野渡」があったことが旧版地形図から読み取れるが、下流の奥戸橋が完成したからだろうか、昭和 5 年の地形図には記載されていない。



地形図　2　(1/10,000 地形図「青砥」)



蛇行跡の湿地がよくわかる (1/20,000 地形図「東京東部」M42)

⑦旧河道（スポーツセンター）

諏訪野八幡神社から奥戸橋へと向かう。途中東へ延びる川沿いの曲線道路が、さらに環状 7 号線の向こうまで膨らませた形になった蛇行した旧河道跡が現れる。あたりは現在、総合スポーツセンターになっているが、昭和 22 年までは湿地、昭和 59 までは荒地であったことが地形図から読み取れる。

辺りを注意深く観察すれば、その痕跡に出会えるかもしれない。

⑧（奥戸北）水神社・（奥戸）水神社

スポーツセンター脇には、立派な構えの中に小さな水神社がある。昭和 40 年地形図からこの地に出現するから、河川改修に伴って移転してきたのかもしれない。一方スポーツセンターの南西にも（奥戸）水神社があって、これは M42 年、T8 地形図からずっと同じ位置に記載がある。

⑨奥戸橋

奥戸橋を渡る。ここからも、蛇行の風景が広がる。奥戸橋のある場所は、かつて「新渡」があった。大正 8 年地形図から橋の記載があり、この辺りではもっとも古い橋だ。同橋を渡った右岸は、親水護岸の緑道が整備されている。

⑩熊野神社・立石さま

奥戸橋を渡り右岸へ出る。バス通りの北にある熊野神社は、平安時代中期の長保年間（999～1003）に、陰陽師阿部晴明の勧請によると伝えられている立派な神社である。近くの、葛飾税務署入口手前には、「帝釈大王　文政三年」などと刻まれた道標らしきものがある。また、道標裏手の、児童公園の隅っこには「立石」様がある。「立石さま」は立石の地名の由来ともなったものである。「根あり石」とも呼ばれ、昔、いくら掘っても、掘っても最後まで行き着かない、地中に埋没する部分が計り知れない、といわれた石で、現在の立石さまはわずかに地表に頭を出している。

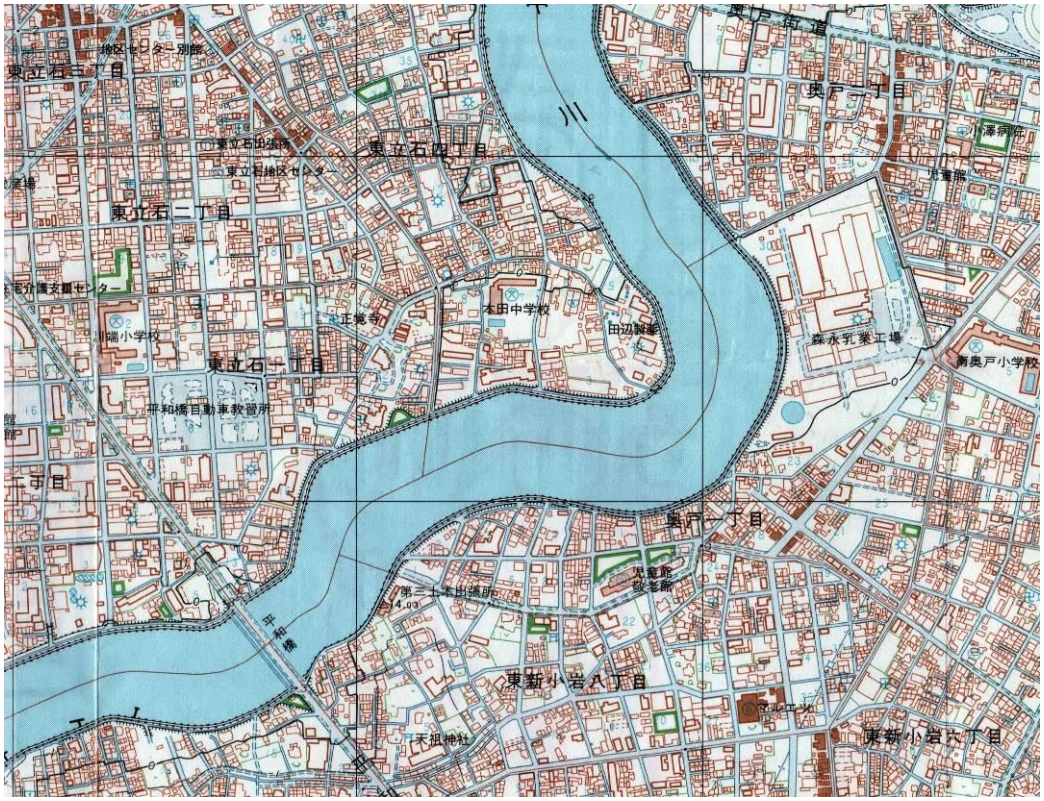
立石さま　　熊野神社

⑪本奥戸橋・子育観音

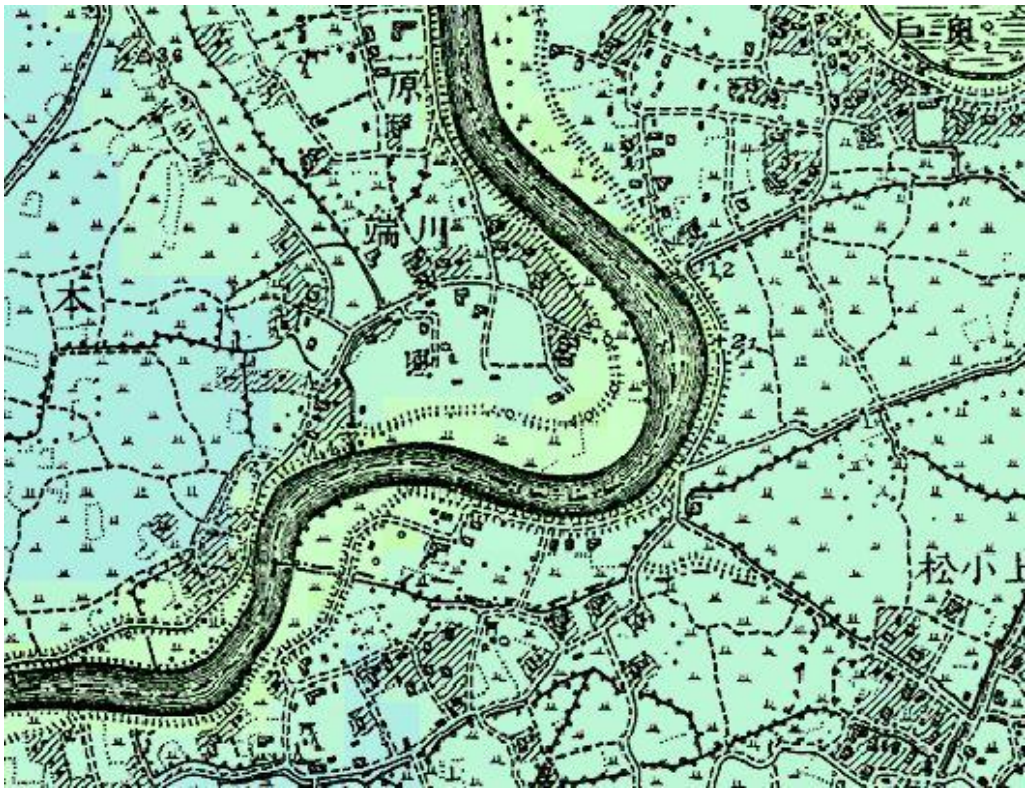
次は昭和 22 年の地形図から記載のある本奥戸橋。橋際には子育観音がある。下流に向けて続く蛇行の風景は美しい。つい最近まで（昭和 59 年地形図）蛇行跡の荒地に続いていたことを思わせる泥地が広がる。

対岸南へ進んだ、森永乳業の工場脇、堤防脇に「森市地蔵」の祠がある。森市という行者が入定した塚であり、森市を祀る地蔵尊がたたずむ。さらに奥戸 3 丁目、南奥戸小学校の南に「鬼塚」がある。この塚は室町、江戸に渡って築造された塚で、江戸時代にはお稲荷様をまつるため土を盛り、塚をつくりなおしたという。

奥戸橋から下流　　本奥戸橋



地形図　3（1/10,000 地形図「青砥」）



（1/20,000 地形図「東京東部」M42）

⑫東立石緑地公園の遊歩道

東立石緑地公園には、曲線を描く遊歩道がある。ここは、つい先ごろまで工場敷地であった場所だ。

⑬（東立石）水神社・眞禅寺から平和橋

この水神社は、1730 年から始まるもので、川端諏訪神社の末社だという。隣接して、独特の本堂を持つ眞禅寺がある。辺りの風景を見やりながら、平和橋へと向かう路上には、距離標と基準点が並ぶ。平和橋は、昭和 40 年の地形図から記載されている。同橋を渡って左岸へと進む。

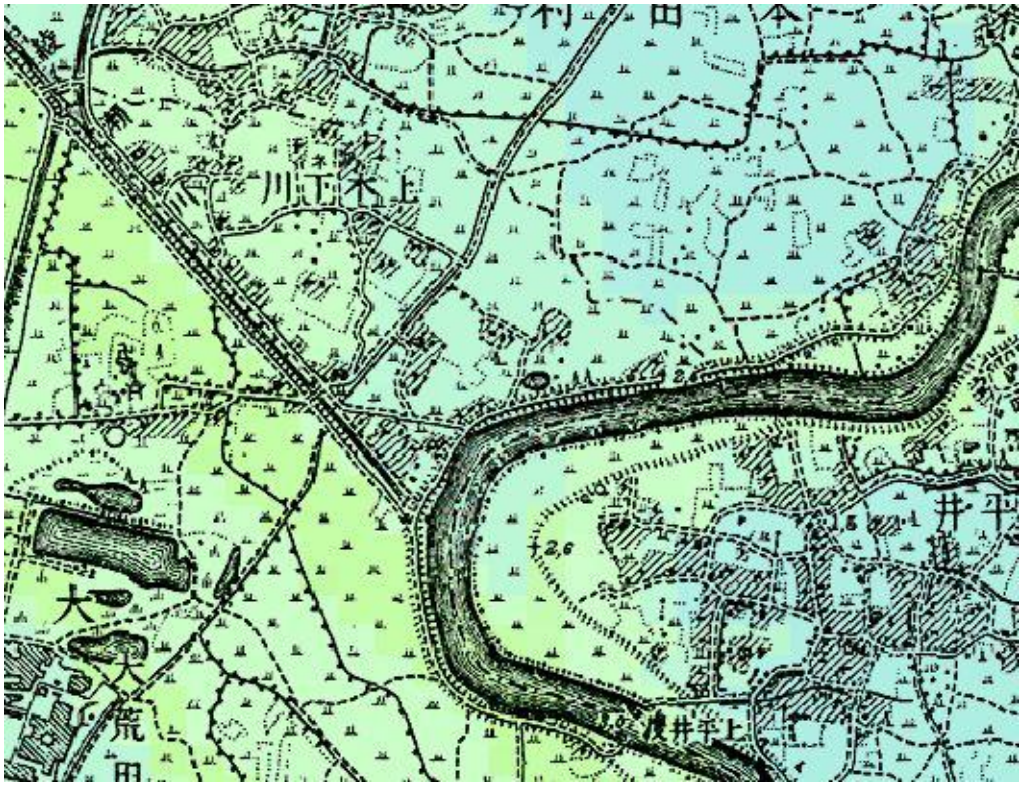
「中川七曲り」の全体像

明治 42 年の地形図では、現在の荒川も中川もまだない

大正 8 年の地形図では左下に現在の荒川が見えるが、まだ現在の新中川は登場していない

（1/25,000 地形図「東京首部」M42、S5）

地形図　4（1/10,000 地形図「青砥」）



（1/20,000 地形図「東京東部」M42）

⑭（東新小岩）天祖神社

平和通の北にある天祖神社は、明治 42 地形図から記載があり、この街歩きの中でもっとも立派な神社の一つである。

上平井橋　　浄光寺（木下川薬師）

⑯上平井水門と上平井橋から浄光寺（木下川薬師）

荒川放水路が開削されたときに、かつての綾瀬川の河道を引き継ぐようにしてできた中川本流は、七曲りの終点から土手を挟んで荒川と平行した流路として改修された。分断された中川の下流部分は荒川右岸（西岸）に旧中川として残ることになった。

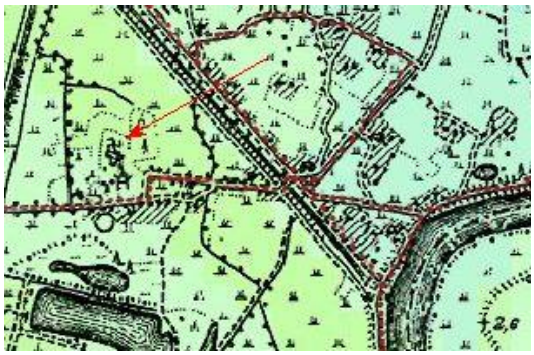
かつての「上平井渡」辺りに架けられた上平井橋は、その荒川放水路の開削が完成した昭和 5 年の地形図から記載がある。

上平井橋から上流の蛇行をみながら渡って右岸北へと進むと浄光寺が現れる。

浄光寺は、49 年創建の古刹で､古くから木下川薬師（きねがわやくし）として知られているほか、徳川家の祈祷所であったという。境内には徳川家光の御手植えの松など見るべきものが多い。明治 43 年（1910）年からの荒川放水路開削で大正 8 年（1919）に現在地に移転した。

そのようすは、特徴的である。当時寺は荒川の右岸（西）への移転を希望したがかなわず、東の改修前の旧中川河道上に移転したのである（昭和 8 年）。同時に、蛇行跡周辺は宅地化が進行した。

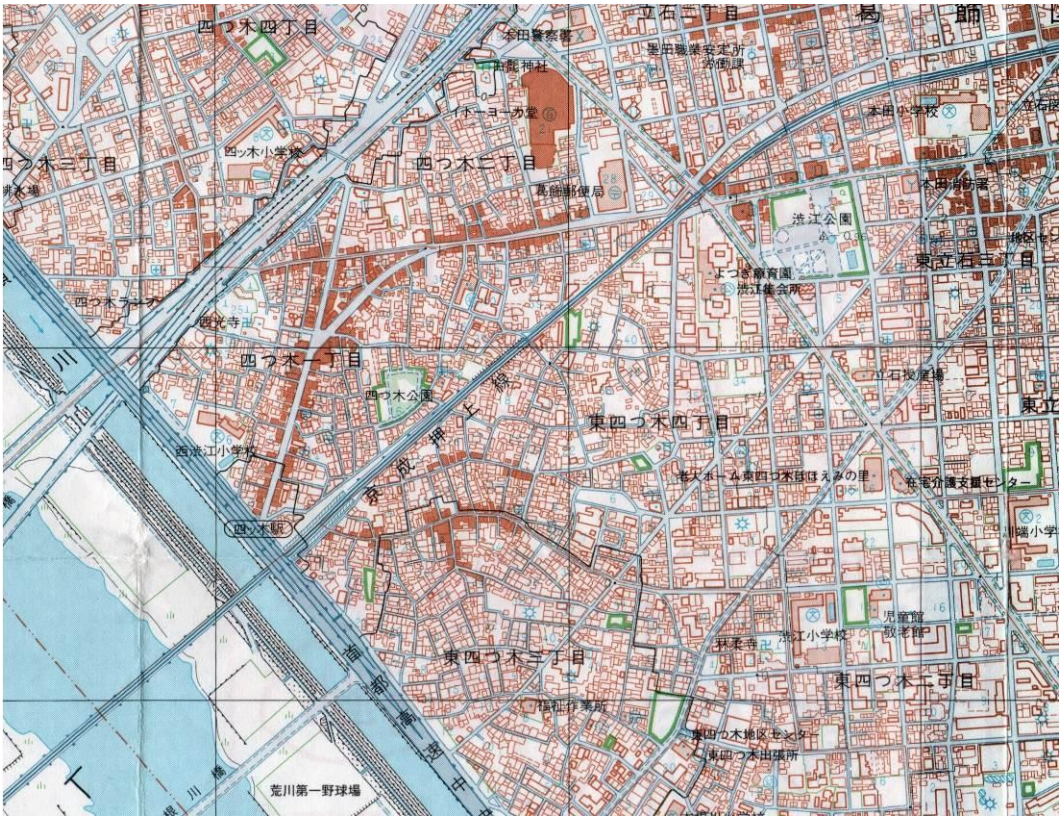
その旧河道は、木根川薬師の北側で当時の曲線がそのまま道路の形状になって残っている。近くには、やや廃れてはいるが、当時の位置に小さな王子白髭神社がある。



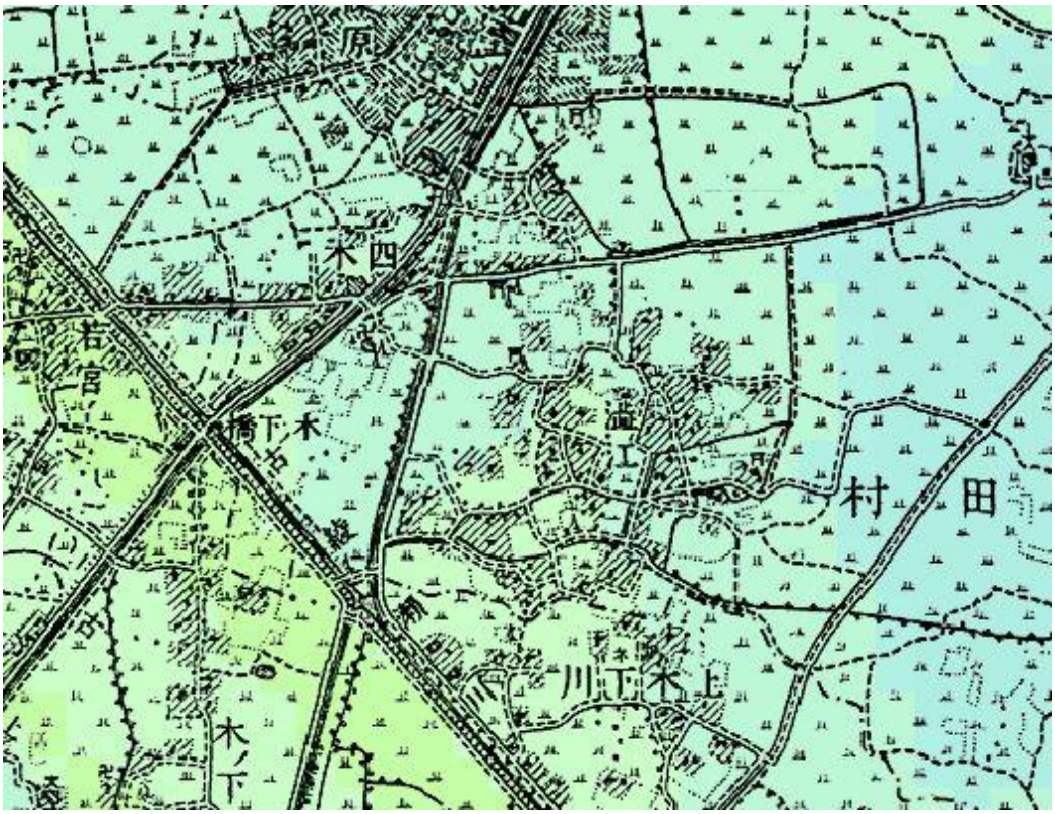
木根川薬師の移転

（1/25,000 地形図「東京首部」S5）（1/10,000 地形図「青砥」）

ちなみに、「木下川」を「きねがわ」と読む由来であるが、もとは「木毛河（きげがわ）」、とか「木毛川」と呼ばれていたのが、「木毛河」を「きねがわ」と読み違え、また、「げ」を「下」と書き表し、「木下川＝きげがわ＞きねがわ」となったとの説があるが、はっきりしない。



地形図　5　（1/10,000 地形図「青砥」）



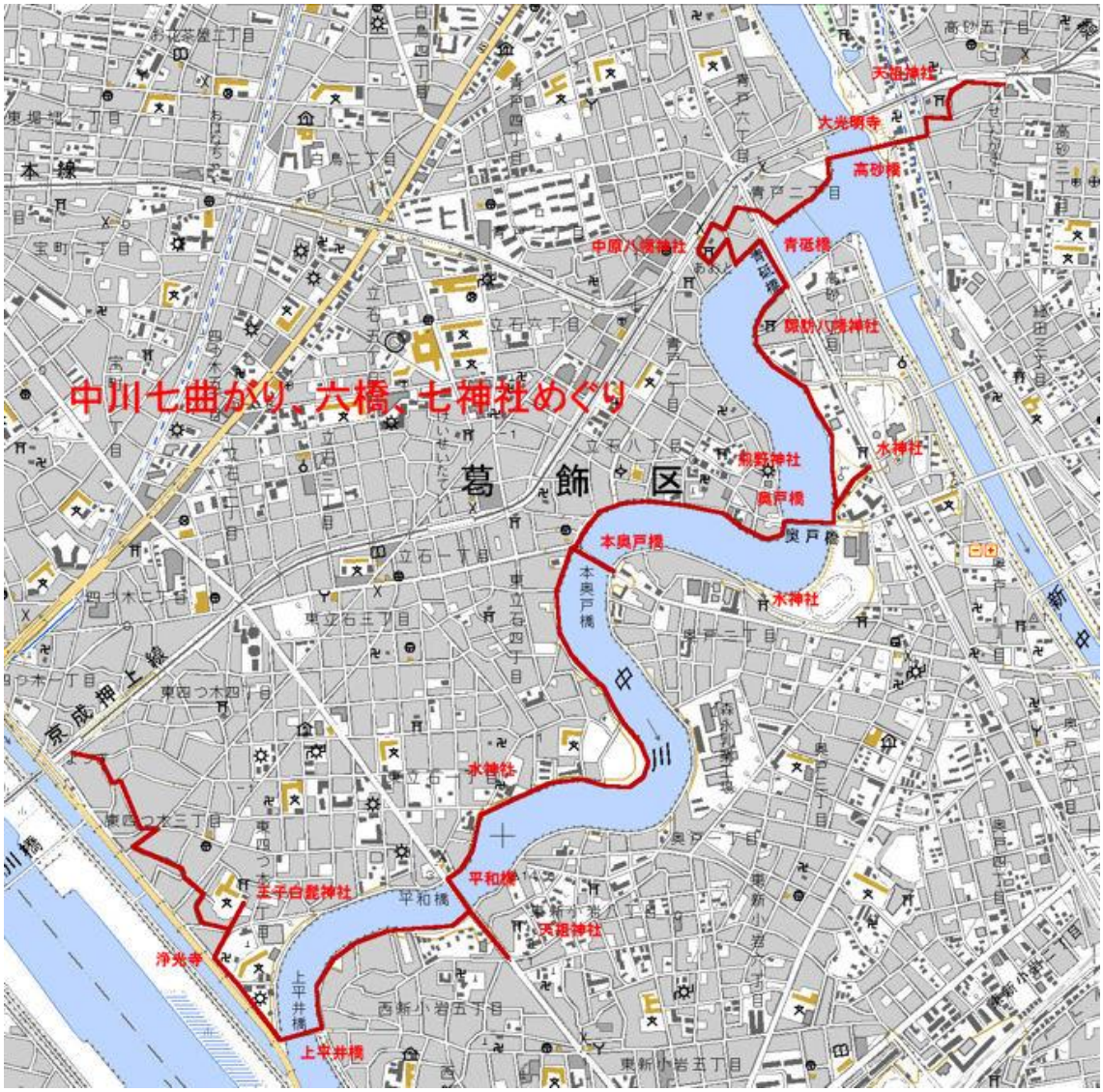
（1/20,000 地形図「東京東部」M42）

⑰京成　四ツ木駅へ

道に迷いそうになりながら、住宅街の小道を抜けて四ツ木駅へ出る。過去と現在の二つの地図を比較すると、東四つ木３丁目辺りの込み入った道は、かつての「澁江」集落の道路網を引き継ぐようにして、今があることがわかる。

一方、京成四ツ木駅周辺の道路と商店街には、荒川という「刀」でぶつりと切り取られたことが、ありありと感じられる。しかも、現在橋を跨いで連なるのは鉄道と主要幹線道路だけであり、それは（当然といえばとうぜんだが）従来の集落形状を無視した、経済論理に基づいて（河川を直角に跨ぐ形で）結ばれているのが特徴的である。大都市を洪水から守るためとはいえ、関連住民には、立ち退き以外にも、計り知れない苦痛が伴ったと思われる。

ルートマップ



＋＊＊＊＊＋　オフィス　地図豆　yamaoka　mitsuharu　＋＊＊＊＊＋